

令和二年度 入学考査問題

東大・医進クラス 2月1日 PM

国語

注意

- (1) 指示があるまで表紙を開かないこと。
- (2) 問題および解答用紙の両方に受験番号・座席番号を記入すること。
- (3) 声を出して読まないこと。
- (4) 解答は全て解答用紙の所定の欄らんに記入すること。

受験番号

座席番号

※問いに字数指定がある場合は、句読点なども一字として数えます。

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「頑張^{がんば}ってね」

「万里さんのケーキ、楽しみにしてるんだから」

「このケーキがないと、午後のお茶の時間が寂^{さび}しくて」

「何かお手伝いできることがあったら言ってね」

① 温^{ぬる}かな励^{はげ}まし。優^{やさ}しいいたわり。

「^Aありがとう。娘^{むすめ}のためにも頑張^{がんば}るつもり。もちろん、お店は続けるわ。ケーキを作るしか、私^{わたし}にできることはないもの。今後とも、ご鼠^{ねずみ}肩^{かた}にね。」

明るく応じ、笑顔を作りながら懸命^{けんめい}に万里は頑張^{がんば}った。店を再開して一ヶ月半が経ったときだった。

最後の客を笑顔で見送^{みおく}ってから、CLOSEDのプレート^{プレート}をドア^{ドア}にかけた。一人、店内^{うち}に戻^{もど}って空^{そら}になったショーケース^{ショーケース}を見ていたら、万里の頬^{ほお}を冷たいものが伝^{つた}った。いやだ、何？^{なに} と思いながら上^{うへ}を見た。どこから水^{みづ}が落ちてくるのかを確かめようとして。けれど、天井^{てんじやう}にも窓^{まど}にも、水滴^{すいじつ}などついていない。なのに、また落ち^{おち}てくる。それが涙^{なみだ}だと分かるまでに少し間^まが要^いった。

私^{わたし}、泣^ないてる？

信じられない思いで、万里は頬^{ほお}に手を当^{あた}てた。

どうして。みんなに励^{げん}まされて、少しずつ元氣^{げんき}を取り戻^{もど}しているのに、取り戻^{もど}しているはずなのに……。なぜ涙^{なみだ}が出るのだろうか？

止めようと思^{おも}っても、涙^{なみだ}はあとからあとから頬^{ほお}を伝^{つた}う。その場^ばを動くこともできないまま、万里はしゃくり上げた。

元氣^{げんき}を出^だして。

お手伝い^{おて伝い}できることがあつたら言^いってね。

唯^{ゆい}香^かちゃんのためにもしつかり。

悠^{ゆう}太^た郎^{らう}が亡^なくなって以来^{いらい}、たくさんの人が言^いってくれた言葉^{ことば}が頭^{あたま}の中で渦^{うず}を巻^まく。

ああ。

万里は両手^{りやうて}で顔^おを覆^おった。

胸^{むね}の奥^{おく}が痛^{いた}い。

そのとき、店のドアがノックされた。

CLOSEDのプレートを掛けておいたのに、気付かないのだろうか。店に明かりがついているから、まだやっていると思いついて入っているのか。泣いているのを見られたくなくて、ドアには目もやらずに横顔を向けたまま、申し訳ありません、というつもりで小さく頭を下げて店の照明を消した。これで閉店の意は伝わっただろう。

なのに、またノックの音がした。仕方なく万里はちらりとドアを見た。大柄な男が、ドアにはめ込まれたガラス越しにこちらを見ている。②「万里と目が合つて、一瞬、笑顔になったが、すぐに眉が強く寄せられた。

「万里さん」

葛城悦司^{かつらぎ えし}だった。悠太郎の高校時代からの友人で、葬儀^{そうぎ}の折もひとかたならぬ世話になっていた。手の甲^{こう}で頬^ほを拭^{ぬぐ}うと、万里は歩み寄つてドアを開けた。

「どうしたの？ 何かあった？」入ってくるなり葛城が訊いた。

「いえ」

万里は首を横に振つた。心配そうに覗き込む葛城の顔を見たら、また涙が溢れそうになったが、必死で堪えた。

「客に何か言われたの？」

誰かにいじめられたんじゃないかと心配している。娘が泣いているのを見た父親の反応そのものだ。普段の万里だったら笑っていただろう。けれど、そのときは笑えなかつた。

実際は葛城が心配したのとは反対だ。周囲の誰もが万里を気遣い、力になってくれようとしていた。それなのに、涙が溢れてしまう。人々の厚意を受け止め続けるのが苦痛になっていたのだ。

葛城に向かって、その気持ちをどう表現すればいいのか分からなかつた。

「ようやく万里の口から出たのは、「疲れちゃったんです」という一言だった。

葛城は虚を衝かれたような顔をして、万里を見つめた。

「お客さんも、仕入れ先の人も、みんな優しくして」と言つたところで言葉に詰まってしまう。

葛城はしばし考え込んでいたが、ぱつと顔を上げて気分を変えるように言つた。

「悠太郎に線香を上げさせてもらつていいかな」

万里はうなずき、ティッシュペーパーを手にとって涙をかむと、店の戸締まりをしてから棟続きの住居へ向かつた。

仏壇は居間にある。葛城が手を合わせている間にキッチンでお茶を淹れた。そうしているうちに、万里の気持ちはだいぶ落ち着いてきた。

テーブルにお茶を置いて、どうぞ、と勧め^{すす}める。葛城は向かい側のソファに腰を下ろし、正面から万里を見つめた。彼が心配してくれているのは分かったが、口を開いたらまた涙がこぼれそうで、万里は黙^{だま}っていた。

「万里さん」葛城が思い切ったように口を開いた。

「はい」

「③ どうせなら、もつと大きな店を切り盛りしてみたらどうだろうか？」

意外な言葉だった。疲れちゃったんです、と口走ったりしたから、しばらく店を閉めてゆつくりしたら？ とでも言われるのではないかと思っていた。なのに、葛城の提案はまるで逆。

もつと大きな店を切り盛り？

「一人でいるのはよくないよ。特にあの店。あそこには悠太郎との思い出が染み付いているんだろう？ 思い出を大事にするのはいいことだけど、今の万里さんにはもつと別の何かが必要だ。そんな気がする」

「だからって、大きなお店なんて」

「前から思っではいたんだ。手作りケーキを売るだけじゃ、もつたいないなってね。もちろん、万里さんのケーキ作りの腕は一級だろうが、何て言うのかな、万里さんのもつとトータルで人をもてなすことができる。ほら、この部屋。あと、悠太郎の歯科医院の待合室なんかも、万里さんが整えたものなんだろう？ 居心地のいい空間を作り出すのがうまいんだ。プロのインテリアコーディネーターなんかとは違う。もつと親しみやすく、商業的じゃなくて、家庭的なんだけど、くだけすぎない。そういう場所」

「ありがとうございます」

「カフェ、がいいんじゃないだろうか」

「カフェ？」

「そう。表参道や青山にあるのを真似る必要はない。万里さんらしいもの。たとえば、万里さんがパリに留学していたときに好きだった店をイメージしたら？」

万里は自分の中のカフェのイメージを探った。万里が好きだったのは、行きつけの本屋の隣にあつた小さな店だ。年季の入ったテーブル。深いローストのコーヒーの味わい。かりつと焼いたベーコンとグリュイエールチーズを挟んだサンドイッチ。そこに集う人々のくつろいだ表情。間断なく続くお喋り。低い笑い声。思い出すだけで、胸の奥にさまざまな感情が湧き上がってくるあの場所。

いつも店の一角で、万里は東京にいる悠太郎を思った。手紙を綴ること多かつた。当時の万里の寂しさや不安を吸い取ってくれたのがあのカフェだった。

「ヨーロッパに演奏旅行に行ったときなんか、路地裏で小さなカフェを見つけて入ってみる。これが、驚くほど居心地がいい。コーヒー

一杯と栗の菓子をもらつて一時間も粘る。文庫本を読んでのんびりする。学生に戻つたみたいない気分になる。いい歳をしておかしいかもしれないけど。万里さんがカフェを作つたら、ああいう店になりそうな気がする」

カフェを経営するなんて、思つてみたこともなかった。なのに、^④聞いた瞬間、胸の中が温かくなった。その場所が浮かんだ。そこにいる自分自身も。

霧が晴れて、目の前が開けていくようだった。新しい世界に出ていけば、もう一度、生きていける。だが、次の瞬間には自問していた。

本当にそんなことができるのだろうか。今まで悠太郎に守られて生きてきた私に。

^⑤少し考えてみます、と言つた万里の表情は堅かつた。

「ゆつくり考えてみたらいいよ。不動産屋に知り合いがいるから、その気になったらいつでも言つてくれよ」

「ありがとうございます」

そのときインターフォンが鳴つた。唯香が学校から帰つてきたのだ。玄関に行き、ドアを開ける。

「ただいま」と言いながら入つてきた。唯香が、玄関に男物の靴を見つけて嬉しそうな顔になる。ぱたぱたとリビングルームに向かつて走り出した。

「葛城のおじちゃま」唯香の声が弾む。

「お帰り。唯香ちゃん」

「ねえ、私のピアノ聴いて。メヌエット、弾けるようになったんだよ」ランドセルを放り投げ、早速ピアノに向かう。

「そりやすごいね。では、拝聴しましょうか」

弾き始める。が、すぐにつつかかる。

「あ、失敗。もう一回最初からね。ちゃんと聴いててよ」

「はいはい」

クレセント交響楽団の常任指揮者である葛城に向かつて、ちゃんと聴いててよ、と言つてのけるのだから唯香もたいしたものだと思ひ、ようやく万里は心から笑うことができたのだつた。

(永井するみ『グラニテ』による)

問一 〳〵線A〳Cの本文中の意味として最も適切なものを次のア〳エから選び、記号で答えなさい。

A ご鼻屑あまにね

ア 引き続き甘やかしてくださいね

イ 他よりも仲良くしてくださいね

ウ 出来が悪くてもお許してくださいね

エ 好意を持ってご利用くださいね

B ひとかたならぬ

ア あれやこれやと様々に

イ 全てにおいて熱心に

ウ 人には言えないほど

エ 最初から最後まで

C 虚を衝かれたような

ア 何を言い出したのかと馬鹿にするような

イ 驚いてしまったことを隠し切れぬような

ウ 予想もしなかったことを言われたような

エ 何かあったのではないかと心配するような

問二 〳線①「温かな励まし。優しいいたわり。」とありますが、ここから、みんなの万里に対するどのような思いを読み取れますか。

「夫の悠太郎が亡くなり」に続ける形で、わかりやすく説明しなさい。

問三 —— 線② 「万里と目が合つて、一瞬、笑顔になつたが、すぐに眉が強く寄せられた。」とありますが、「眉が強く寄せられた」ことから読み取れる葛城の気持ちほどのものですか。最も適切なものを次のア～エから選び記号で答えなさい。

- ア 万里が心を閉ざしている様子を見て、悠太郎の代わりになれていない自分を責める気持ち。
- イ 万里が居留守を使つたのを見て、嫌われてしまったのかもしれないという不安な気持ち。
- ウ 万里が疲れ切っている様子を見て、どうしてあげれば良いのだろうかと思ふ気持ち。
- エ 万里が泣いているのを見て、客に何か言われたのではないかと心配する気持ち。

問四 —— 線③ 「どうせなら、もつと大きな店を切り盛りしてみたらどうだろう？」とありますが、葛城の言葉にはどのような意図が込められていますか。最も適切なものを次のア～エから選び記号で答えなさい。

- ア ケーキ作り以上に適した仕事を紹介することで、生活をもつと豊かにするべきではないかとすすめる意図。
- イ 思い出にとらわれることなく新たな一歩を踏み出してみたら、気持ちが晴れるのではないかと伝える意図。
- ウ 悠太郎の代わりにいつでも自分が支えとなるから、もつと頼りにしてほしいという思いを打ち明ける意図。
- エ 生きている人間には未来があるのだから、娘の唯香のためにも立ち直らなければならないと激励する意図。

問五 —— 線④ 「聞いた瞬間、胸の中が温かくなつた。」とありますが、ここから読み取れる万里の心情を説明したものととして最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 悠太郎の死にとらわれて自分自身のことを後回しにしていたことに気づかされ、本当は新たな生き方がしたいと思つていたことを肯定されたために、小さな勇気がわいてきた。
- イ 悠太郎の死によつて前向きに生きる姿勢を失つていたが、カフェという言葉が自分の思いもしなかつた新しい未来の姿をありありと想像させ、希望を感じることができた。
- ウ 悠太郎がいけない現実から逃げ出そうと打ち込んでいた仕事だったが、それこそが悠太郎にとられる要因であると認識し、全く別の生活環境に身を置けば救われると気付いた。
- エ 悠太郎がいなくなつても自分のことを考えてくれる存在がいるという安心感と、新たに精神的な支えを得られるかもしれないという予感に、今更ながらときめいた。

問六 — 線⑤ 「少し考えてみます、と言った万里の表情は堅かった。」とありますが、どうしてですか。わかりやすく説明しなさい。

問七 — 線⑥ 「唯香が、玄関に男物の靴を見つけて嬉しそうな顔になる。」とありますが、ここから読み取れる唯香の心情を説明したものととして最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の話を聞いたり相手をしてくれたりする葛城が来てくれたことがわかって気持ちが明るくなった。
- イ 父代わりの葛城の訪れを示す靴があることで何より大事な「家族」の時間の始まりを予感していた。
- ウ 日頃忙ひごろいそがしい母を明るくさせるありがたい存在である葛城の訪れを示す靴を見て安心する気持ちになった。
- エ 自分の演奏を聴いてくれる唯一の存在である葛城が来てくれたことがわかって幸せな思いに包まれた。

問八 本文中の万里の心情を説明したものととして適切でないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア みんなの励ましも優しさも受け止め続けるには重たく感じるものだった。
- イ 葛城の意外な提案に思いやりを感じながらも素直に頷うなずくことができなかった。
- ウ 学校から帰ってきた唯香が元気に走る姿に救われたような気持ちになった。
- エ 無邪むじや気きすぎる唯香の言葉の内容を素直に面白いと感じられるようになった。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

サッカーの試合を見ていたとする。Aというチームが勝ち、Bというチームが負ける。当然観客はその結果に対してさまざまな感情を抱く。単純に言えば、Aのサポーターは喜び、Bのサポーターは悲しむ（あるいは怒る）だろう。では、こうした感情は知覚に反映されるのだろうか。

ひとつの答え、そして私がとりたくない答えは、「ノー」である。感情は、あるものごとを知覚したことによって引き起こされる。つまり、ものごとの知覚が原因で感情はその結果であり、知覚そのものには感情は含まれていない、と。私はそのようには考えたくない。

まず強調しておかねばならないことは、感情のあり方は知覚と同様に事態をどう記述するかに依存しているということである。観客の一人に「なぜ喜んでいいのか」と尋ねてみる。そのとき、典型的には「Aが勝ったからだ」といった返事が返ってくるだろう。その喜びは、記述中立的なできごとそのものによって引き起こされたのではなく、そのできごとをその人がどう記述するかに関わっている。「Aの勝利」という意味が、喜びに結びついているのである。

このポイントを押さえておくため、「原因」と「理由」という概念を区別することにしよう。

I 「なぜ歯が痛むのか」と問うたとする。答えは「虫歯がある」といったものとなる。虫歯があることは歯痛の原因である。そして、こうした因果関係においては記述は重要な役割を果たしていない。その虫歯が「酸によって歯からリン酸カルシウムの結晶が溶け出している」と記述されようと、あるいは「歯磨きを怠けた報い」と記述されようと、記述の仕方とは関係なく、私の歯痛の原因は虫歯になっている。その歯の状態である。一般に、個別の因果関係はできごととできごとの関係であり、そのできごとがどう記述されるかにはよらない。

他方、感情の場合にはそうではない。「なぜ怒っているのか」と尋ねられて、「Bがふがいない負け方をしたからだ」のように答える。ここにおいてそのように記述することはその感情にとって本質的である。「Aが宿敵に勝った」と記述する人はその試合の結果を喜ぶだろう。あるいは、「Bに賭けていたのに大損だ」と記述する人はその試合の結果を悲しむだろう。そこで、このような記述依存性を示す「なぜ」の答えを「原因」と対比して「理由」と呼ぶ。

ここで、ひとつのことを指摘してみたい。② 日本語で感情を表わす語彙は驚くほど少ない。ひいきのチームが負けたときも、賭けに負けて大損したときも、親が死んだときも、失恋したときも、あるいは食べようと思って運んでいたケーキを落としてしまったときも、私たちは「悲しい」と言う。悲しみという感情の多様さに比してあまりにも語彙が貧弱である。

II これは、私の意見では、けつして悲しみに対する私たちの捉え方がずさんだからではない。むしろ逆ではないだろうか。悲しみのあり方はあまりにも千差万別である。だからそれをタイプ分けすることを日本語は放棄した。その代わり、悲しみはその理由に応じて千差万別であることをそのまま受け入れたのである。「ひいきのチームが負けたので悲しい」と言えば、それは「失恋したので悲しい」とも「食べようと思って運んでいたケーキを落としてしまったので悲しい」とも異なる悲しさであることが表現される。悲しみの理由は無限に多様であるから、理由によって悲しみのあり方

を特定することで、無限に多様な悲しみの質を表現できる。あとは、「少し悲しい」「とても悲しい」と、悲しみの大きさを副詞を用いて表わせばよい。このように、感情のあり方が感情を表わす語彙そのものによってではなく、その感情の理由によって表現されるということは、感情のあり方と感情の理由とが **III** な関係にあることを示唆しているだろう。

そしてこれは、^③感情がその理由となるべきことと切り離しては存在しえないことを意味している。そのことを説明するために、まず因果関係の場合—— **IV**、理由ではなく原因の場合——を考えてみよう。暑いと汗をかき、寒いと体が震える。暑さは発汗の原因であり、寒さは体の震えの原因である。このような原因—結果の関係の場合には、暑さと切り離して発汗というできごとだけを考えることも、また寒さと切り離して体の震えだけを考えることもできる。それに対して、感情とその理由の場合には、その関係は本質的である。ひいきのチームが負けたことによる悲しみの場合、その悲しみは「ひいきのチームが負けた」というできごとから切り離して考えることはできない。あたかもチェンヤ猫が笑いだけを残して姿を消したように、悲しみだけを残してその理由となるできごとを消し去ることなどできない。理由が異なれば、感情のあり方も異なるものとなる。感情はその理由となるできごとのもとにある。

それゆえ、ひいきのチームが負けたことによる悲しみは、「ひいきのチームが負けた」というその人の思いにおいてのみ存在する。親の死の悲しみは、私が親の死を思う、その思いにおいてのみ、存在するのである。そのことを強調するならば、「親の死についての思いに悲しみが伴う」という言い方は不適切と言うべきだろう。それではまるで感情は思いに付加されるプラスαであるかのように響く。悲しみは、むしろ、副詞的に思いを彩る。「ゆっくり」を動作から切り離すことなどできないように、感情もまた、思いから切り離すことはできない。悲しみという状態で、私は親の死について思うのである。

そして、思いは知覚にこめられる。だとすれば、悲しみに彩られたその思いもまた、知覚にこめられるはずである。住む人のいなくなった部屋を見る。不動産屋が見ればただの空き部屋だが、私は親の死という思いをこめてその部屋を見る。そして私のその思いは悲しみに彩られている。それゆえ、私の知覚もまた、悲しみに彩られている。

では、感情を反映した知覚のあり方は相貌だろうか。私は「相貌」を「物語によって決定される知覚の側面」と規定した。感情はその理由と本質的に結びついており、理由は記述に依存している。そして記述は物語を開く。「親の死」と「失恋」は当然異なる物語に位置づけられるが、「親の死」と呼びうる一つの同じできごとによってもたらされた悲しみでも、その悲しみの理由を「愛する者を失った」と記述するか「十分な世話ができなかった」と記述するか、あるいは「遺産が少なかった」と記述するかで、そこに開かれる物語は異なる。つまり、異なる理由で悲しんでいる人は、それぞれ異なる物語を生きているのである。それゆえ、感情を反映した知覚のあり方は、物語を反映した知覚のあり方として、すなわち、相貌として捉えることができる。

〔野矢茂樹「心という難問 空間・身体・意味」による〕

問一 I・II・IVに入る語として最も適切なものを次のア～オから選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはいけません。

ア むしろ イ だが ウ あるいは エ つまり オ たとえば

問二 — 線① 「原因」と「理由」という概念を区別することになろう。」とありますが、次のア～オから「できごと」と「原因」の組み合わせとして適切なものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア できごと⇨喜ぶ 原因⇨チームが勝った
イ できごと⇨歯が痛む 原因⇨虫歯がある
ウ できごと⇨悲しむ 原因⇨Bに賭けていたのに大損した
エ できごと⇨悲しむ 原因⇨失恋した
オ できごと⇨汗をかく 原因⇨暑い

問三 — 線② 「日本語で感情を表わす語彙は驚くほど少ない。」とありますが、この理由を筆者はどのように考えていますか。次の文を完成させる形で、わかりやすく説明しなさい。

感情を表わす語彙が少ないのは「A（二十字以内）」ではなく、日本語が「B（十字以内）」ことを放棄する代わりに「C（二十五字以内）」からである。

問四 IIIに入る語句として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 抽象的ちゆうしょう イ 典型的 ウ 本質的 エ 一面的

問五 — 線③「感情がその理由となるできごとと切り離しては存在しえない」とありますが、このことを具体的に説明した一文を本文中から探し、はじめと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

問六 — 線④「親の死についての思いに悲しみが伴う」という言い方は不適切と言うべきだろうか。」とありますが、筆者はその理由をどのように考えていますか。わかりやすく説明しなさい。

問七 — 線「感情は知覚に反映されるのだろうか。」とありますが、筆者の意見はどのようなものですか。最も適切なものを次のア～エから選び記号で答えなさい。

- ア 感情は知覚に反映され、さらにはまた物語も知覚に反映されるものである。
- イ 知覚には思いがこめられ、感情は思いに付加されるので反映していると言える。
- ウ 感情は知覚と同様に事態をどう記述するかに依存しており、反映の関係性にはない。
- エ 知覚が原因で感情はその結果でしかないので、感情は知覚に反映されていない。

問八 次のア～オについて、本文の内容と合うものにはA、合わないものにはBを書きなさい。

- ア サッカーの試合でAが勝ってBが負けた時に喜んでいる観客は、必ずしもAのサポーターだけとは限らない。
- イ 「Aが宿敵に勝った」と記述する人は試合結果を喜ぶ人であり、この時に記述された内容は「理由」である。
- ウ 悲しみの理由は無限に多様であるから、感情のあり方は感情を表す語彙そのものによって表現されるべきだ。
- エ 不動産屋にとっては空き部屋でしかなくても、そこに住んでいた今は亡き親を思う私の思いには悲しみが伴う。
- オ 同じ出来事に対する悲しみだとしても、そこにある理由が異なるのなら異なる物語を生きていると言える。

【三】 次の問いに答えなさい。

問一 次の文の「で」と同じ使い方をしているものをア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

私の妹は小学生である。

ア 雪が降りそうである。

イ 雨が止んで、日が差し始めた。

ウ 大事なことは、文書で報告する。

エ 今日の風は、さわやかである。

オ わがはいは、猫である。

問二 次の文の主語、述語を一文節で書き抜いて答えなさい。

あの映画のファンが、続編を待ち望んでいる。

問三 次の□にア～オのいずれかを入れてことわざ・慣用句を完成させるとき、一度も使わないものを一つ選び、記号で答えなさい。

□に小判

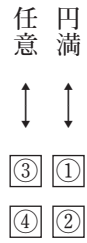
鳶が□を生む

□の知らせ

藪をつついて□を出す

ア 蛇へび イ 亀 ウ 虫 エ 猫 オ 鷹たか

問四 次の□にア～コのいずれかを入れて対義語を完成させるとき、①～④に入るものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。



ア	制	イ	外	ウ	和	エ	勝	オ	複
カ	不	キ	石	ク	例	ケ	強	コ	合

問五 次のア～エの文の順序を整えて意味の続きのはっきりした文章にするには、どのような順序にすればよいですか。はじめから順に記号で答えなさい。

ア こうした「五輪」の重なりは五大大陸の相互（そうご）の結合と連帯を意味し、平和への発展を願うものとしてオリンピック精神の象徴（しょうちゆう）となっているのです。

イ これはピエール・ド・クーベルタンが着想したもので世界五大陸を表していますが、特定の大陸を表すものではありません。

ウ 一方で、色については参加国の国旗に使われている色が少なくとも一つは含まれるように配慮（はかりよ）して選定されました。

エ 近代オリンピックは「五輪」と称（しょう）されることが多くありますが、それはオリンピックシンボルの形がもとになっています。

【四】 次の①～⑩について、――線の漢字はひらがなに、カタカナは漢字に直しなさい。

- ① 海外から穀物を輸入する。
- ② 異口同音に賛成した。
- ③ 郷里から遠く離れた町で働く。
- ④ 正誤表から判断する。
- ⑤ 洗ったら生地が縮んでしまった。
- ⑥ このシャソウからの景色はすばらしい。
- ⑦ 集団生活においてキリツを守るのは大事なことです。
- ⑧ 混雑に備えてリンジバスが用意された。
- ⑨ 儀式に臨むコウゴウの姿がニュースで流れた。
- ⑩ 邪魔にならないようにコードをまく。

受験番号

座席番号

得点

二
問一 A
E
B
ア
C
ウ

問二 夫の悠太郎が亡くなり、一人で娘を育てていかなければならない万里を元気づけよう（勇気づけよう）という思い。

問三 エ
問四 イ
問五 イ

問六 今まで悠太郎に守られて生きてきた自分が一人で新しくカフェの経営をするのは難しいと考えたから。

問七 ア
問八 ウ

三
問一 I
オ
II
イ
IV
エ
問二 イ
オ
※順不同

問三		
III	II	I
受け入れられた	理由に応じた	感情に對する私たちの考え方
	千差万別であること	をその万万

問四 ウ
問五 はじめ ひいきのチ 終わり できない。

問六 感情は思いに付加されるようなものではなく、思いから切り離すことのできないものであるから。

問七 ア
問八 ア B イ A ウ B エ B オ A

三
問一 オ
問二 主語 ファンが 述語 いる（得ち望んでい）る（も可）
問三 イ

問四 ① カ ② ウ ③ ケ ④ ア
問五 エ ↓ イ ↓ ウ ↓ ア

※①②完答

※③④完答

※完答

四
⑥ 車窓 ⑦ 規律 ⑧ 臨時 ⑨ 皇后 ⑩ 巻く
① こくもつ ② いく ③ きょうり ④ せいと ⑤ ちぢんで